

# 木桶の伝統文化を後世に

三代にわたって木桶作りを続ける野田市関宿台町の小峯穰二さんは、千葉県指定伝統的工芸品製作者として認定されています。確かな腕を持った職人である小峯さんの技術を求めて、市内だけにとどまらず、市外からも広く愛用者が訪ねてきます

## 木桶職人の道へ

小峯さんの祖父は東京深川で桶職人として身を起こし、同じく桶

職人となった父の吉一さんが戦時下の大空襲で焼け出された際、母方の生家があった関宿に移りました。以来、小峯さん一家はこの地

で家業を続けてきました。

昭和63年には父の吉一さんが千葉県指定伝統的工芸品製作者に、平成22年には小峯さん本人も千葉県指定伝統的工芸品製作者として認定されています。

## 受け継がれる伝統工芸

江戸時代に食料の保存器や運搬道具として広く普及した木桶は、どの家庭でも使われていました。明治以降、風呂桶や湯桶としても利用されていた木桶の需要は、昭和39年の東京オリンピックのころピークを迎えます。

その後、大量生産の、安価な合成樹脂製品が普及するに従い、木桶の需要は次第に減少し、桶職人の数も減って行きました。

市内で今も伝統を受け継ぐ桶職人は、小峯さんただ1人です。全国を見渡しても、「各県に2、3人も居ないんじゃないかな」と小峯

さん。

「『桶屋の看板を出しているお店を野田で見かけた』と、人づてに聞いたお客さんが車で何時間もかけて来てくれたこともありましたが」と逸話も披露します。

## 厳しい修行で習得した技術

小峯さんが、父親の吉一さんに師事したのは高校を卒業した18歳の時。職人である父の背中には憧れでした。

修行の始まりは木材の見極めからで、「曲がっていないか、油が残っているか、木目はどうかなど、用途に合わせて見極めることを厳しく仕込まれました」と話す小峯さんは、木を見る目を養うために木場はもちろん、木曾ヒノキの原産地である御嶽山にまで足を運ぶこともあるそうです。

「悪い木はあばれるんです。全体が調和せずにそこだけが目立ってしまう。接着剤を一切使わないのに、水は一滴も漏れない。まるで最初から1枚の木材と思わ

